

学 習 院 大 学 史 料 館 ミ ュ ー ジ ア ム ・ レ タ ー

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.44

発行日 ● 令和3年(2021)2月15日

ごあいさつ

学習院大学史料館は、小説家・辻邦生の関係資料を数多く所蔵していますが、その中には、辻邦生の配偶者であり、初期キリスト教美術やビザンティン美術などの研究者として知られる辻佐保子(名古屋大学・お茶の水女子大学名誉教授)の資料も含まれています。本ミュージアム・レターで紹介するのは、故辻佐保子教授が海外の調査先で撮影した、約1万6千点の美術作品等の貴重なスライドのデジタルアーカイブ化と目録作成のプロジェクト(2017年10月～2020年3月)についてです。この事業によって、辻佐保子という美術史家の思索の理解が、ますます進展することが期待されます。プロジェクトに助成をいただいた公益財団法人鹿島美術財団に厚く御礼申し上げます。(史料館長・水野謙)



昭和50年(1975)3月 辻佐保子
アルジェリア・ティバサ遺跡にて(調査スライドより)

故辻佐保子教授旧蔵貴重スライド デジタルアーカイブ化と目録作成

学習院大学文学部哲学科教授／プロジェクト研究代表者
島尾 新

辻佐保子先生のスライドをデジタル画像化する話が持ち上がったのは2017年の3月だった。私の専門は室町時代の水墨画で、先生が研究されていたキリスト教美術やビザンティン美術などとはまったく関係がない。本来なら東大時代の教え子だった高橋裕子先生(学習院大学名誉教授)が中心となるべきところ、ちょうどお引きになるタイミングだったので、名前だけの代表者となった。

敢えて理由を探せば、まだ東京国立文化財研究所に就職したの頃に、人文科学の分野では始まったばかりの「電算化」(もう死語に近いが)に関わっていて、佐保子先生から仲間たちとともに「コンピュータ・ポーズ」とからかわれたことがあった。定年も近づく頃になって、また「電算化」絡みでお会いできたのが、なにかのご縁だろうか。

デジタル化したスライドは、フランス・イタリアからトルコ・ロシア・チュニジアにわたる約1万6千点余。今も建つ教会や修道院とそれらの壁画などのイメージは、つい「同じ物の古い写真」と思われがちだが、そんなことはない。「美術史」は、作品が生きてきた・見られてきた歴史を記述するもの。佐保子先生のスライド群も、写っているものたちの「生命誌」を編むための貴重な伝記資料なのである。

そんなドキュメントの多面性は、お寄せ頂いた素敵な文章に散りばめられている。伊藤怜さんがフェレンティッロの修道院の「エルサレム入城」の壁画を、武田一文さんがカッパドキアの様相を、活き活きと描き出すように、写しとどめられたイメージは、劣化や破壊を含めて作品の「定点観測」のひとつであり、木俣元一さんが、ヴェズレーのキリスト像のスライドに、佐保子先生の深く鋭いまなざしを読み取り、瀧本みわさんが先生の手帳から跡づけるように、研究者の足跡と営為をリアルに記しとどめる「研究史」の一部でもある。そして加藤磨珠枝さんが、ブルーストのデッサンのスライドから、佐保子先生と姿は見えぬ辻邦生の創作の世界へ入り込むように、美術史研究者にとっての作品写真は——つい撮影者の位置に自分を置いてしまいがちながら——さまざま実感させ想像を掻き立ててくれる最たるものなのである。そんなノスタルジーと研究史の交錯は、米倉立子さんの語りのとおり。門外漢にとっては、そんなこんなを見聞きするのが楽しかった。

さて、デジタル化によって、情報は保存されたが、それらを共有のためのプラットフォーム作りはこれからである。

年代	辻 佐保子(昭和5年(1930)～平成23年(2011)) 略歴
昭和25年(1950)	3月、愛知県立女子専門学校英文科卒業。4月、東京大学文学部美学美術史学科入学
昭和28年(1953)	3月、同大学卒業。4月、国立近代美術館調査科に就職(→10月、退職)
昭和29年(1954)	4月、東京大学大学院人文科学研究科修士課程(美術史学専攻)入学(→翌3月、修了)
昭和32年(1957)	4月、東京大学大学院人文科学研究科博士課程(美術史学専攻)入学。10月、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ大学高等学術研究所に在籍
昭和36年(1961)	10月、パリ大学に博士論文を提出、美術史の博士号を取得
昭和41年(1966)	4月、フランス政府招聘研究員として渡仏、パリ大学高等学術研究所に在籍
昭和46年(1971)	11月、名古屋大学文学部美学美術史学科助教授(→昭和51年(1976)教授)
昭和57年(1982)	『古典世界からキリスト教世界へ—舗床モザイクをめぐる試論—』でサントリー学芸賞
平成元年(1989)	4月、お茶の水女子大学文教育学部哲学科教授(→平成8年(1996)3月退官)
平成7年(1995)	イタリア政府より国家功労賞カヴァリエーレ・ウフィツィアーレ章
平成15年(2003)	フランス政府より教育功労賞オフィシエ勲位章。9月24日、佐保子の尽力により夫妻が借りていたパリ・デカルト街のアパルトマン壁面に滞在記念のプレート設置される
平成16年(2004)	地中海学会賞。『辻邦生全集』の刊行に精力を注ぐ(～平成18年(2006))

名古屋大学文学部美術史学教授
プロジェクト共同研究者
担当地域：フランス
木俣 元一

フランスを代表する美術史家ダニエル・アラス(1944-2003年)の著書『Détails(細部)』(1992年)では、イタリア語の「バルティコラーレ」と「デッターリオ」という用語を使って美術作品の細部を2つに分類している。前者は単純に、描かれた人物や事物、あるいは作品全体の小さな部分のことを指す。「まなざし」の歴史に挑むアラスが目指すのは、作者であれ鑑賞者であれ、ある主体が細部を作り出す注視や切断等の行為の結果として生まれてくるものを意味する。

カメラで作品の一部をクローズアップして撮影する行為も、この「デッターリオ」に対応する。辻佐保子氏が撮影したスライド画像のアーカイヴには数多くの細部が含まれ、これらは著作や論文で公表された図版では見えにくい、1人の傑出した美術史家の「まなざし」を跡づけるとても貴重な資料だ。このような観点から私がとくに関心を持ったのは、平面的な作品よりも、彫刻という立体物を撮影した画像である。

辻氏は、1971年秋に名古屋大学文学部に赴任したが、その翌年の講義で早速アンリ・フォションのロマネスク彫刻に関する著書(1931年刊)を取り上げ、その邦訳を1975年に中央公論社から刊行している(『ロマネスク彫刻—形体の歴史を求めて—』)。また1976年には、小学館の世界彫刻美術全集の第6巻として『ロマネスク』を出版した。1970年代前半にはロマネスク彫刻に関心を持ち、多くのモニュメントを訪ねていることが、辻氏の取材ノートからもうかがわれる。おそらく、この時期の調査旅行における辻氏の重要な関心事の1つは、当時翻訳に取り組んでおり、刊行から40年以上を経た「現在もなお私たちが最もしばしば立ちもどり、新たな問題を解く糸口を見つけるのは、他ならぬフォションの著作だ」と邦訳の「あとがき」で評したフォションの預言的思考を現場で確認することであったと推測される。

辻氏の撮影した彫刻の細部画像には、独自のアングルから対象を捉えているものはいくつか見られ、その作品の思いがけない姿を浮かび上がらせている点に強い感銘を受けた。ここでは、その代表的な事例を2点紹介させていただくことにしよう。

まず、ヴェズレー、サント=マドレーヌ聖堂ナルテックスのチュンバスムの中央に位置する、「聖霊降臨」の巨大なキリスト像を斜め右下からの視点で撮影した、驚くべきスライドを挙げたい(図1)。このヴェズレーのキリスト像については、ほかならぬ辻氏が翻訳したフォションの著作に、その肉づけと光線の扱いに関する精緻きわまる形体論的分析が見られる。辻氏撮影の画像は、フォションの観察がある部分では正確でありながら、ある部分では重要な見落としを含んでいることに気づかせてくれる。というのは、その画像からは、「ほとんど偏平で線刻的なこの神」というフォションの記述はたしかにその上半身には当てはまるが、下半身については、ほとんど丸彫りに近い実体感が与えられているのがわかるからだ。フォションは、キリスト像の表面に刻まれた襷の線刻の網目が「光線を捕囚にすることの効果」、「肉体の充実感を彫金師的な仕上げによって暗示している」と述べている。ところが、実際には少なくともキリストの下半身では、キリストの左脚の上に右脚が重なって相当な厚みを与えられ、偏平な上半身との対比

により、ある種の遠近法的効果が生み出される。辻氏のこのスライドには、フォションの見事な記述を自らの眼で検証しようとする強固な意志が感じられ、その批判的な「まなざし」の痕跡がそのまま定着されていると言えよう。

さらに美術史家としての「まなざし」が感じられる、非常に興味深いスライドとして、もう1点、アヴァロン、サン=ラザール聖堂扉口の人像円柱の上半身を右側面からのアングルで撮影したものに言及しておきたい(図2)。辻氏の取材ノートによれば、1973年8月27日(月)朝にパリを出発し、同日アヴァロンを訪れている。このスライドはその時に撮影されたものかもしれない。この像については、同じようなアングルによるスライドが他にも2点残っていることから、辻氏がこの像のこの眺めに明らかに強い関心を寄せていたと考えてよい。この視点の選択によって、アヴァロンの彫像の身体が、その頭部の立体感に比して、驚くほどに薄いということをはっきりとしたいという意図があったように思われる。ここに、ジャルトルやサン=ドニといったフランス北部における同時代の作例を含め、一連の人像円柱がロマネスクの終わりなのか、ゴシックの始まりなのか、そしてブルゴーニュとフランス北部の関係はどのようなものなのか、その歴史的位置づけに関するフォションの議論に回答するヒントが隠されているという鋭い直感があったものと想像される。



図1 ヴェズレー、サント=マドレーヌ聖堂ナルテックスのチュンバスム部分



図2 アヴァロン、サン=ラザール聖堂扉口の人像円柱(部分)

立教大学文学部キリスト教学科教授
プロジェクト共同研究者
担当地域：イタリア(ナポリ、シチリア他)
加藤 磨珠枝

今回の辻佐保子先生旧蔵スライド・デジタルアーカイヴプロジェクトは、私にとって単なる資料整理ではなく、中世美術史家としての彼女の功績を振り返り、遺跡や教会堂、風景へ向けたまなざしを追体験し、また、教材用スライドの分類法を知る、今は亡き先生との対話の機会であった。この貴重な体験を通じて印象に残ったエピソードをひとつ紹介しておきたい。

私がアーカイヴを担当した「C-5」の分類番号をもつスライド箱についてである。そこには総数203枚に及ぶスライドが含まれ、冒頭はクノップフ、ミュシャ、モローなど、19世紀から20世紀初頭の画家たちの作品複写がまとめられていたため、おそらく美術史概説用の教材か何かであろうと最初は軽い気持ちで眺めていた。しかし、偶然目に留まった3枚のスライドから、思いもよらない新たな世界へと誘われていった。

その3枚のスライドとは、フランスの小説家マルセル・ブルーストが描いたデッサン群である。書籍から複写した図版であるため、画像資料としての価値は副次的だが、フィルムを挟むマウント上には、佐保子先生の筆跡で「③①ブルースト ランのステンド・グラス デッサン」「③②ブルースト デッサン アミアンの聖堂」(図1)、「③③ブルースト リオン聖堂 ノートル・ダム・ド・パリ」とメモ書きがあった。画家でもない文筆家の素描が、なぜ、ここに含まれるのかを疑問に感じた私は、はっとあることを思い出した。

それは、佐保子先生の夫君である辻邦生先生が、かつてブルーストの世界に没頭し、小説創作に大きな影響を受けたという逸話である(『啓示としてのブルースト』『永遠の書架にたちて』所収)。こうして生み出された彼の作品で、もっともブルースト的といわれるのが、最初の長編小説『夏の砦』(1966年刊)だ。実はこれに関しては、後に『婦人之友』(1995年)誌上の連載で、興味深い創作秘話が明かされている。

それによれば、『夏の砦』の主人公、支倉冬子の描写には、妻(佐保子)の語った幼年期の思い出が、詳細なディテールにまで反映され、「心ひかれる女性」の間接的なモデルにされていたというのだ。これについては佐保子先生自身も、この小説に「自分が幽閉されているように感じる」(『たえず書く人』辻邦生と暮らして)第1章)と述べるほどで、すなわち、ブルーストと佐保子先生は、邦生先生の創作を

通じて融合され、一つの作品へと昇華されていたのである。

この複雑な三角関係に気づいて、あらためて前後に配列されたスライド群を眺めると、ブルーストのデッサンの前には、彼が『失われた時を求めて』執筆前のスランプ状態の時に、創作

への靈感を受けたイギリスの美術評論家ジョン・ラスキンの素描16点も含まれていた(図2)。ブルーストはラスキンに傾倒し、彼の本の叙述に従ってアミアンやヴェネツィアなど、ラスキン巡礼の旅に出かけただけでなく、彼の著作『アミアンの聖書』『胡麻と百合』の翻訳も手がけたことで知られ、先のブルーストによるデッサンは、この時期に描かれたものである。

要するに、このスライド箱のなかの一部には、美術史的な基準作ではなく、書くことを模索した小説家たちの靈感源を跡づける作例が集められていたのだ。また、各マウントには、通し番号が①~③⑧まで(一部欠番あり)付されていたので、講演会などで使用したものかもしれないが、その詳細(時期、場所)については調査中である。

その他、スライド群の最後には、辻先生ご夫妻がシチリア旅行の際に撮影した海岸風景やセリヌンテの古代神殿遺跡(図3)などのスライドも38点含まれていた。フィルムの右下の日付表示から、1988年6月19~20日の旅行時の撮影と推測される。それらの1枚は、断崖絶壁に建つ特徴的な立地から、エリチェのノルマン城(別名ウエヌスの城)(図4)と同定できるが、この神秘的な霧に包まれる城の風景は、邦生先生のシチリア紀行文『海に向かって、夏』の一節「エリチェに変幻する霧」で以下のように描かれている。

「昼食前にはあれほど青かった空は、あとからあとから湧き上がってくる霧に閉ざされて、何もかも掻き消される。教会も消え、断崖の途中に繁る木々も消え、下のほうの田畑も消え、ただ白い茫々とした霧のながれだけが走ってゆく。霧が薄れると、墨絵のように城や城壁が浮び上る。」「美しい夏の行方 イタリア、シチリアの旅」に所収)

スライド自体に、邦生先生は一度もその姿を現してはいない。それにもかかわらず、この古ぼけたスライド箱が、ふたりの思い出の詰まった宝箱のようにも見えてきた。



図3 シチリア、セリヌンテ C神殿の遺跡 1988年6月20日撮影



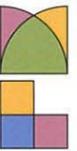
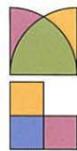
図1 マルセル・ブルースト「アミアンの大聖堂」 1901-1904年



図2 ジョン・ラスキン「ルッカ、サン・ミケレ聖堂のファサード、小アーチ」 1845年



図4 シチリア、エリチェ ノルマンの城 1988年6月19日撮影



辻先生のビザンティン美術調査に関する写真について

早稲田大学文学学術院招聘研究員

担当地域：アルジェリア、ウクライナ、ギリシア、トルコ、ロシア

武田 一文

辻佐保子先生の論集に『ビザンティン美術の表象世界』と題するものがある。ビザンティンとは東ローマとも呼ばれる、かつて東地中海・バルカン半島を中心として栄えた帝国である。辻先生は、この旧ビザンティン圏、そして帝国の文化的基盤であった正教会の美術を遺す地域を精力的に調査されていた。調査対象は主に10世紀～14世紀の教会建築、教会内部の壁画であった。またロシアでは下って15世紀ごろまでの教会建築とイコン（礼拝用の板絵）を調査している。併せて、現地の美術館では古代ギリシア・ローマから中世までの様々な美術品を詳細に撮影されている。その中で、本稿では特にトルコ・カッパドキアの調査について記したい。

キノコ型の奇岩、それを眼下にした気球ツアーなどを名物に、多くの観光客を集める地カッパドキアであるが、古くは4世紀に「カッパドキア3教父」と呼ばれる重要な聖職者を輩出するなど、キリスト教の歴史においても重要な土地であることは日本であまり知られていない。同地には、しばしば誤って「異教徒の目から逃れるため」岩壁やキノコ岩に掘り込まれたと伝えられる、岩窟教会が無数に存在する。実際には暑寒いずれも厳しい気候に対応するための合理的な選択だったものだが、これらはビザンティン帝国が当地を支配した11世紀頃まで、小規模な教会の奉獻が盛んであった時代に制作されたものが多い。3教父への追慕か、中世壁画の霊性を求めてか同じ正教を信仰するロシアからの観光客も多いようであるが、殆どの教会はカッパドキア各地に点在し、一部の博物館化したもの以外を訪問するには、時に家畜の闊歩する道路に車を走らせ、そしてトレッキングする必要がある。現代でこそ情報が増えたものの、辻先生の調査時には、恐らく仏、独の研究者による文字による位置記述を頼りに、キノコ岩の間を教会を探しながら歩くことも必要だったと思われる。

正教会の通例に従い、カッパドキアの教会も内壁一面にフレスコ壁画を描く。とは言えこれらが写真資料付きで報告されることは少なく、研究を深める上で現地の訪問は不可欠と言ってよい。辻先生は後にカッパドキアの壁画を主題とした論考を複数著されており、調査による実見と撮影画像が研究に大きな意味を持ったことは疑いない。一方、先生が遺されたカッパドキアの数十に及ぶ教会の写真資料は、ビザンティン美術史上においても意義深いものである。それはカッパドキアの教会が置かれた特殊な事情と関係する。カッパドキアは1071年以降トルコ系民族の支配するところとなり、「教会」も多くは顧みられなくなった。現在、教会として利用されるものはなく、一部は博物館として管理されるが、残る多くは適切な保護がなされていない。そのため経年劣化、落書きなどの人為的破損により壁画の状態は年々悪化している。従って、数十年前のカラー写真により、壁画の状態が記録されていることはかつての状態や劣化の進行状況といった知見として重要である。一例として、ソーアナル地区ユラル教会天井部分（図1、13世紀か）を挙げる。天上の楽園に憩うアブラハム・イサク・ヤコブが描かれるが、2014年筆者撮影の画像（図2）と比較すると、右端のヤコブの剥落が進行し下半身がほぼ失われたこと、手の届きやすい低い部分に数字を中心とした落書きがかなり増えていることが分かる。一方、保護のため現在はモルタルで外壁および崩落した開口部を塗り固めたエル・



図1 ソーアナル地区ユラル教会天井部分



図2 天上の楽園に憩うアブラハム・イサク・ヤコブ

ナザール教会（10世紀）の、かつての姿を見ることができるとも興味深い（図3）。しかしこれらの教会は、岩壁に穴を掘り込んで制作されたため開口部に乏しく、内部は非常に暗い。先生が撮影された写真も、被写体が何かを判別することが困難な状態であるものが散見された。本プロジェクトにおける筆者の作業はこれらの同定が大きなウェイトを占めたが、改めて各教会の内部構造や画像配置を熟考することとなり、筆者にとっても意義深いものであった。

カッパドキアだけでなく、東欧やロシアの教会は、現代でも西欧の教会に比べアクセスが整っているとは言い難い。小さな堂宇であれば地域の信徒以外の訪問は稀である。辻先生の調査メモでは、ある教会で「中でメモを取ることも許可されなかった」と嘆かれているなど、調査にはひとかたならぬ苦労があったと想像される。しかしその苦労の先に数百、千年を経て遺るフレスコ、煌めくモザイク、燭光に照らされるイコンとの出会いがあるのがビザンティン美術の醍醐味であり、先生の遺された多数の写真を思えば、その感動はまたひとしおであったろうと俚ばれるのである。



図3 エル・ナザール教会

辻先生のフィールドワーク：スライドを通じて見えた姿

立教大学非常勤講師

担当地域：イタリア（ローマ、ヴァチカン、ラヴェンナ、ポンペイ）、フランス（アルル）

米倉 立子

今回寄稿させていただくにあたり、担当したスライドを見直してみた。担当した量は全体のほんの一部であるが、それでも合計2200枚超あった。中には文献の図版を撮影したものや購入したスライドも入っていたが、辻先生ご自身の撮影スライドは7割くらいを占めていたのではないだろうか。

私は、主にイタリアの初期キリスト教時代の聖堂やカタコンベ（地下墓所）、石棺、ポンペイ遺跡などを写したスライドを担当したが、どの対象も丁寧に細部まで写っている。特にカタコンベの壁画は、似たようなモチーフや装飾パターンが多数撮影されており、傷みの多い壁画の一部が写っていたりすると、どのカタコンベのどの墓室のどの向きの壁を撮影したものか、同定に非常に苦労した。「ああ、私も先生と一緒にそのカタコンベの墓室で首をぐるぐる回して、写されたモチーフがどこにあるのか、この目で確認したい！」と何度思ったことか。こうやって見ると、細部こそ欠落部がないように自分で撮影しておかねばならないという先生の気持ちが伝わってくる。撮影当時の状況から考えれば、自分が欲しい部位の写真を後から手に入れることは極めて難しく、また外国での調査で二度目の訪問があるかどうか分からないわけで、常に一期一会で撮影できるときに丁寧に記録しておくことが何より大事だったのだろう。

スライド周囲のマウントには、先生の走り書きのメモが記されていることがしばしばあり、それを頼りにヒントが得られることもあった。これだけ膨大なスライドを毎回整理するのはいかに大変なことかと感嘆してしまう。でもメモが少々達筆すぎる場合も多く、「もう少し解説しやすくしていただければ、より助かったのに…」と思うこともあった。まあ、自分のためのメモだから、こんな風に私に読まれたりするとは思っていませんものね。

先生が撮影していた時代より後とはいえ、私もかつて前世紀末から今世紀初め頃には大きなカメラを背負い、スライドフィルムでの撮影を体験したデジカメ以前を知る世代である。先生の時代に比べれば、何事も相当楽で便利になっていただろうが、その頃でもスライドフィルムはそれなりに高価だったし、感度が低いフィルムだと暗い聖堂内ではきちんと写らず、フラッシュを使っても届く範囲は限られているし、高感度フィルムだと高価になる割に解像度は下がる。しかもどんなフィルムで撮ろうと、狙い通りに写っているかどうかは現像してみなければわからなかった。高価だから無駄には撮れないのだが、数打たないとまるで写っていない恐れもある。そんなわけで、調査中の写真はひたすら調査対象ばかりを写したのになり、後で見返しても資料写真ばかりで、美味しい食事や楽しんでいる自分の姿など、スナップ写真はほとんど残っていない。今どきの「映え」狙いで楽しみな雰囲気やいかに演出し、素敵に残そうかと工夫を凝らす若者からしたら考えられないことだろう。

でもだからこそ整理しているスライドで、フラッシュが届く狭い範囲しか写ってなかったり、全体が暗すぎたりピントが甘かったりするスライドは、資料としては利用価値が低くとも、なんとか写り込んだ情報を読み取ろうという気になった。きっと先生が撮影していた頃は、オート

フォーカスなどなく、毎回ピントを合わせ、フィルムの巻取りも自動ではなかったのではないかと。巻取りに失敗したままうっかり蓋を開けてしまえば、せっかく撮影したフィルムを感光させる恐れもあって、意外と最後まで侮れないのだ。

今や勝手に補正してキレイに写してくれ、その場で写りを確認できて、データの保存も簡単で、後から加工も簡単にできてしまうデジカメやPCが当たり前になり、ネット上で自分で撮影する以上に良く撮れている細部の画像を探し出せると思いがちな現代の私のダレた感覚からしたら、先生はいかに緊張感をもって対象と対峙し、丁寧に撮影していたことだろう。膨大なスライドを見ていく中で、見逃しが無いよう観察して、記録を正確に残し、さらに記憶にもしっかりと刻まねばという使命感に満ちたフィールドワークに従事する先生の姿が立ち上がってきた。こうやって調査現場に身を置いて、その季節や時間の自然光の量、聖堂や墓室の空間の大きさ、スライドには写り込まない音や匂いを感じながら、先生はその図像を創り出した人々、それを見ていた人々の感じ方、考え方に想像を巡らしていたに違いない。「当時の人々がどう感じていたか」を自分の感性に基づく想像だけで語ることは学術書ではできない。だが自身の体験に基づく実感が根幹になれば、時空を超えた他者に近づくのは難しい。先生のしなやかな感性と尽きぬ研究意欲が伝わってくる。こう書きながら院生の頃、自分の意情と不勉強を見抜かれると緊張しながら先生と言葉を交わした気持ちが蘇ってきた。いつでも、いつまでも辻先生は辻先生でいらっしやるのだった。

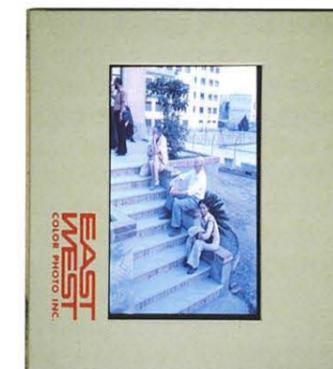


図1 エクスカーションの合間の休憩中だろうか、他の研究者と共に珍しく写り込んだ辻佐保子先生の姿。撮影したのは辻邦生先生ではないだろうか。

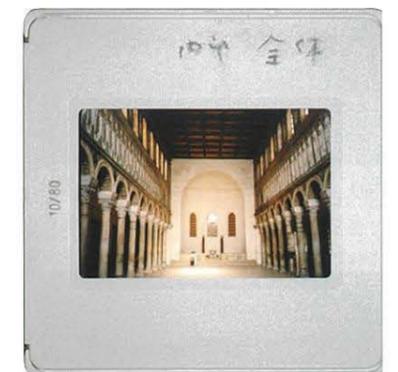
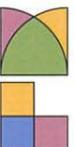
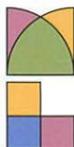


図2 イタリア、ラヴェンナのサンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂内陣。創建時のアプシスは8世紀の地震で崩壊し、どのような図像が描かれていたのが不明。20世紀には創建当時のアプシスの位置に無地のアプシスが復元されていたが、現在は、より奥行き深いバロック期のアプシスが聖堂の時代変遷を伝えるものとして見えるようになっている。



東京造形大学非常勤講師
担当地域：イタリア
伊藤 伶

イタリア中部ウンブリア地方フェレンティッコ近郊の谷間にサン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院は建つ⁽¹⁾〔図1〕。同修道院は12世紀末頃に制作された壁画で知られており、辻佐保子教授旧蔵スライドには壁画と建築に関する64枚のスライドが残る。同修道院聖堂身廊と勝利門壁面に旧約・新約聖書サイクルなどが現存する。新約聖書サイクルは14場面構成され、20枚のスライドがある。単独場面のスライドで最も多いのは、「エルサレム入城」(5枚)〔図2〕となり、「洗足」(3枚)、「最後の晩餐」(2枚)が続く。辻佐保子氏が意図的に「エルサレム入城」を多く撮影したかは明らかではない。しかしながらフェレンティッコの「エルサレム入城」が、同時期にイタリアで描かれた図像とキリストの表現が異なる点を考慮すると、意図的であった可能性はあるだろう。本論では「エルサレム入城」を取り上げ、辻氏が同場面に着目した点を検討したい。

サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院はランゴバルト族スポレート公ファロアルド2世(在位703-20)により創設された。現聖堂は3つのアプシスをもった単廊式バシリカであり、身廊南北壁面、中央アプシス勝利門壁面に12世紀末頃にローマで活動した画家たちによる壁画を有する。南北壁面に旧約・新約聖書サイクル、勝利門壁面に燭台、神の手、キリストなどが描かれる。1981年、ウンブリア州環境・建築・芸術・歴史・文化財保護局は耐震工事などを行い、1991-95年、中央修復研究所は壁画を修復した。辻氏のスライドは壁画の状態から修復以前の撮影と考えられる。

身廊南壁面は水平に三分割され、「エルサレム入城」は南壁面中央下段に位置する。驢馬に横乗りしたキリストは正面を向いて、エルサレムの城門前に到着する。背後にはペテロを先頭に使徒たちが続く。右側の城門から棕櫚の木を手にした群衆が溢れている(マルコ11:1-11)。スライドB4_285、286のように、壮年で髯のキリストは少し傾きながら正面を向く。キリストの白地の鞍下には色鮮やかな装飾が施されており、玉座のようである。



図1 フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院、外観



図2 エルサレム入城、フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院聖堂、12世紀末

「エルサレム入城」の真上には「東方三博士の礼拝」〔図3〕が配される。画面左から三博士は贈り物を捧げつつ、画面右のマリアの膝に座るキリストを礼拝する(マタイ2:1-11)。聖母子の左には天使が座り、左目が少し見開いたマリアは宝石で装飾された、濃紺のマフォリオンというヴェール状衣装を被り、左手で幼児キリストを支えている。



図3 東方三博士の礼拝、エルサレム入城、フェレンティッコ、サン・ピエトロ・イン・ヴァッレ修道院、12世紀末

「エルサレム入城」のキリストと「東方三博士の礼拝」のマリアは、ローマのラテラーノ宮殿サンクタ・サンクトールム礼拝堂に納められる救世主イコンとローマの《サン・シストの聖母》イコンに倣ったと指摘された⁽²⁾。

イコンとは礼拝用の聖画像を意味する。ラテラーノの救世主イコンは6-7世紀の制作とみなされ、玉座の全身像のキリストが少し体を傾けた正面観で描かれる。このイコンは「人の手で作られたのではない(聖像)」⁽³⁾ととらえられ⁽³⁾、加筆と傷みのため、現在は壮年のキリストの顔のみが残る。ローマには複数の聖母または聖母子イコンが伝わっており、福音書記者ルカの手による真の肖像と考えられ、救世主イコンとともに崇敬を集めた⁽⁴⁾。なかでも7-8世紀の《サン・シストの聖母》や複製は「執り成しの聖母」と呼ばれ、宝石で装飾された濃紺のマフォリオンを被ったマリアは、キリストと信徒の仲介者として片手をキリストへ、もう一方の手を信徒へ向ける。この聖母の特徴として、見開いた左目も認められる。

8世紀半頃、救世主イコンは宗教行列で運ばれ始め、9世紀には8月15日の聖母被昇天祭において、ローマの各聖堂の聖母イコンとともに行列で使用された⁽⁵⁾。12世紀になると、ローマと周辺地域では救世主イコンと《サン・シストの聖母》などの聖母イコンが複製され、宗教行列とともに各地に普及した⁽⁶⁾。

フェレンティッコのキリストは玉座の全身像、少し体を傾けた正面観が、救世主イコンと共通し、マリアはマフォリオン、左手の仕草、見開いた左目が、《サン・シストの聖母》に類似する⁽⁷⁾。イコンを模倣した聖堂壁画の前例はあるが、フェレンティッコのように新約聖書サイクルにイコンの図像を用いるのは、新しい試みであった。よって辻氏は「エルサレム入城」のキリストに救世主イコンとの共通点を見出したため、多くのスライドに記録したのであろう。

(1) G. Tamanti, *Gli affreschi di San Pietro in Valle a Ferentillo*, Napoli 2003.
(2) H. L. Kessler, "Il ciclo di San Pietro in Valle: fonti e significato," in Tamanti, *op.cit.*, p. 96; S. Romano, "Il ciclo di San Pietro in Valle: struttura e stile," in Tamanti, *op.cit.*, pp. 65-66.
(3) W. F. Volbach, "Il Cristo di Sutri e la venerazione del SS. Salvatore nel Lazio," *RendPontAcc* 17 (1940-1941), pp. 157-195; M. Andaloro, "L'acheropita," in C. Pietrangeli (ed.), *Il Palazzo Apostolico Lateranense*, Firenze 1991, pp. 81-90.
(4) 加藤磨珠枝「ローマの聖母子イコンの起源について」〔千葉大学人文研究〕33 (2004)、95-104頁。
(5) E. Parlato, "Le icone in procession," in M. Andaloro, S. Romano (eds.), *Arte e iconografia a Roma dal tardoantico alla fine del Medioevo*, Milano 2002, pp. 55-72.
(6) Parlato, *art.cit.*, pp. 55-72.
(7) Romano, *art.cit.*, pp. 65-70.

東京藝術大学非常勤講師
担当地域：フランス、スペイン、イタリア、北アフリカ
瀧本 みわ

辻佐保子教授旧蔵スライドコレクションには、1957年から1961年までのフランス留学中にヨーロッパ各地の聖堂や美術館で撮影したスライド群があります。その一枚一枚に目を通し、クローズアップされた図像や写真の画面構成を見てゆくと、佐保子先生が、各聖堂の訪問時には調査対象の作品を既に熟知し、研究用の図版として明確な構想を持って撮影していることがわかります。

また、本史料館には、スライドと共に、先生の調査対象作品への透徹した眼差しを感じることができる貴重な手帳も所蔵されています。その一部は、フランス留学中に実施した欧州各地の調査旅行や展覧会(1958年6月から1961年12月まで)での取材を、デッサンとフランス語メモによって記録したもので、合計13冊が残されています。この一連の手帳は、今でもパリの学生たちで賑わうサン・ミシェル通りの書店兼文具店Gibert Joseph、あるいはリシュリュエ通りの国立図書館旧館すぐ近くの書店(現存せず)のロゴの入った手のひらサイズのノートで、赤、青、緑など色を毎回変更しながらも、1冊(1960年ローマ滞在中の第9冊目、前冊でページ不足となり、おそらく現地で急遽調達した1冊)を除いて、揃いで購入されています。

手帳がどのようなものであったか、「1960年8-9月(第7冊目)スペイン、アルル、マルセイユ、ラングドック地方、プロヴァンス地方」を例にとって見てみましょう。

持ち主がすぐに分かるように名前と住所の書かれた扉頁(図1)には、ボブヘアの女性(佐保子先生)と、鼻に二つのホクロを持つ男性(邦生先生)の二コマ漫画が描かれています。ワンピースにロングネックレス、小さなハンドバックを持つ佐保子先生の足元には、クリュニー美術館所蔵の連作タピスリー《一角獣と貴婦人》に登場する愛らしいさぎと犬が描かれています。カメラバックを持つ邦生先生は、小動物たちと待つ佐保子先生に急いで駆け寄り、手には小さなチケットを持ち、「(Voici, deux billets!(切符2枚買って来たよ!))」と声をかけると、佐保子先生は、「(Mais non, j'ai besoin encore deux autres. (だめよ、あと



図1 手帳VII
扉ページの一コマ漫画



図2 カオールのサンティエニス聖堂北扉口の遠望

2枚必要じゃない))と怒られる、やさしくユーモラスな漫画です。

こうして列車での夏の調査旅行を目前に、その高揚感を描いた扉絵に始まる手帳の内容は以下のような構成となっています。

・(冒頭)スペインから南フランスの旅に関する事項：スペインで訪れるべき美術館と鑑賞すべき作品のリスト、北東スペインの地図と道程、南西フランスのユースホテルのリスト等。

・1960年8月18日から9月15日までに訪れた聖堂や美術館での調査メモ(イルン(スペイン)到着—マドリッド、バルセロナ経由—ラングドック地方—プロヴァンス地方—グルノーブル、リヨンを経由しパリへ戻るまで)。

・(末尾)旅行中に購入した書籍代、文献表、次回の調査先、列車時刻表、スペイン語メニューの単語帳、紹介状や美術館の許可証などアンドレ・グラパール教授(パリ大学での指導教官)に依頼する項目等の忘備録。

佐保子先生の手帳の醍醐味は、やはり、訪れた聖堂や鑑賞した美術作品を実現した際に残した調査メモです。先生の視点によって捉えられた作品描写を辿ることで、私たちはその思考過程に僅かながらも近づくことができるためです。例えば、9月6日、二人はラングドック地方のスイヤックとカオールのロマネスク聖堂巡りをしており、約50枚のスライドが残されています(図2)。カオールでの調査メモ(図3)には、サンティエニス聖堂北扉口タンパンの書き起こしデッサンとその図像内容がフランス語で記され、連筆ながらも、浮彫の人物像やモチーフ、その配置が事細かに描写されています。この美しいロマネスク聖堂のタンパンは「キリストの昇天」と「聖ステファヌス伝」を組み合わせた図像が特徴的ですが、デッサンでは、翼と手を大きく広げて緩やかにのけ反る天使(図3右下)や、キリストの姿を仰ぎ見る使徒の一人(図3左下)がクローズアップされて描かれています。背を向け、キリストの昇天に立ち会うこの使徒は、タンパンを見上げ感嘆する、聖堂の来訪者の姿と重なります。画面と鑑賞者の立つ現実空間をつなぐ造形的な特質とその面白さが直筆のデッサンにおいても指摘されているのです。

また、佐保子先生のスライドと手帳を、邦生先生の手記(『空そして永遠 パリの手記V』)と照らし合わせると、カオールのタンパンの「天使の大胆な美しい曲げた姿態」についての記述と出会うことができます。聖堂扉口の前で、この天使の造形について二人が交わした会話までも聞こえてくるようです。このように、本史料館所蔵の辻佐保子先生のスライドと手帳は、美術史的な資料価値を超え、一人の美術史家の思索や感動を伝える貴重な記録となっています。

※辻邦生先生の手記でのカオールの記述「スイヤックの駅前でソーダのみ休み、二時五十七分の列車(ガンリン・カー)でカオールにゆく。少しあれた町(帰りに遠望したときはきれいだった)。天使の大胆な美しい曲げた姿態。ここもクーボールを帽子のように二つにせ、ファサードがあり後陣の上はとがった屋根がのっている。内は広く、柱がない。川のふちで休み、広場でフォワールを開いているのを通り過ぎ、中世風の美しいヴァラント橋をみ、駅にかえり、六時八分のキャブドナック行きに乗る。」(辻邦生『空そして永遠 パリの手記V』河出書房 1984年より)

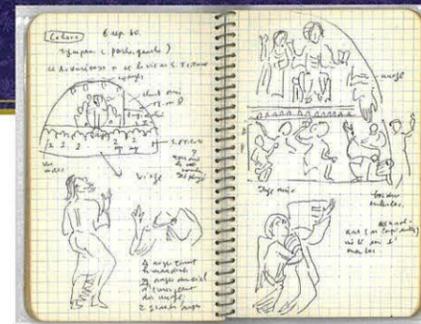


図3 手帳VII
1960年9月6日付カオールのサンティエニス聖堂扉口彫刻に関するメモ

〈辻佐保子手帳一覧〉

※手帳種類は販売店(書店、文具店)のロゴがあるものについては、Gが「LIBRAIRIE-PAPETERIE/JOSEPH GIBERT/30.BOULEVARD St-MICHEL,26/PARIS-6e」、Pが「L・Humaine Comédie/LIBRAIRIE-PAPETERIE/108/8.RUE DE LOUVOIS/PARIS(2E) RIC.08-08」を指し、無記入はそれ以外を指す

手帳種別*	表題(文中の「/」は改行を示す)	国名(主な地域)	年代	同時期の辻邦生の海外移動記録(佐保子はほぼ全旅行に同行)*
1	《Chaire de Maximien》/ I. / Paris, 3 juin → / S.TSUJI	イタリア(ラヴェンナ)	(1958頃～)	
2	S.TSUJI/Le 26 juillet, 1958 → / Le 11 août 1958 / [II] / à Poitiers	フランス(ボワティエ)	1958/7/26	1957年9月4日、フランス政府保護留学生として横浜からフランス郵船カンボージュ号で渡仏
3	S.TSUJI/[III]/Le 12 août 1958 → / Le 28 août / Italie	イタリア(ピサ、ローマ、フロレンス、ラヴェンナ、ヴェニス、ヴェローナ、プレシア)	1958/8/12～8/28	1958年4月、ジュネーブ、ベルン、チューリッヒへ。7～8月、クレルモンフェランに滞在、この地を拠点にオーヴェルニュ地方を旅行。ボワチエ大学中世文明研究所夏期講座に短期出席後、ニースに滞在。最初のイタリア旅行へ
4	S.TSUJI/Le 6 septembre 1958 → 9 novembre / [III] / Exp. Miniatures byzantines / Paris - Londres / Exposition of Byzantine Art.	フランス(パリ)	1958/9/6～9/9	
5	S.TSUJI/Exposition Miniatures/byzantines/Le 23 novembre 1958 → / Le 15 août 59 / [V]	フランス(パリ)	1958/11/23～1959/8/15	1959年8月～9月、アテネ、デルポイ、オリンピア、シチリア島をめぐる。この際バルテノン神殿で創作の契機をつかむ
6	G S.TSUJI/Grèce,Sicile / (1959.8-9.) / [VI]	ギリシア、シチリア	1959/8～9	
7	G S.TSUJI/Espagne/Arles Marseilles/Languedoc-Provence/(1960.8-9) / [VII]	スペイン、フランス(アルル、マルセイユ)	1960/8～9	
8	G S.TSUJI/ITALIE/ROME/ FLORENCE/ MILAN(1960.10-11) / [VIII]	イタリア(ローマ)	1960/10～11	1960年7～8月、スペインから南フランスを旅行。12月、フライブルグに滞在。チロル地方、オーストリア、ミュンヘン、フランクフルトに滞在
9	ITALIE	イタリア(ローマ、フロレンス/フィレンツェ、ミラノ)	1960/10/17～19	
10	G S.TSUJI/Paris/Belgique/Hollande/ 1960.11 → 1961 sep.oct. / [X] / Rome/ITALIE	フランス、ベルギー、オランダ、イタリア(ローマ)	1960/11～1961/9～10	
11	G S.TSUJI/ITALIE/oct.1961 → nov.1961 / [XI] / (RABULA)	イタリア(バルマ、フロレンス、アッシジ、ラヴェンナ、パドヴァ、ヴェニス)	1960/11～1961/9～11	1961年1月31日、マルセイユからフランス郵船ラオス号で帰国
12	G S.TSUJI/Paris/Munich-Vienne/Liste des microfilms/Photos. Miniatures/cottes. Biblio Micros etc./nov.1961 → / [XII]	フランス(パリ、ヴィエンヌ)、ドイツ(ミュンヘン)	1961/11	
13	G Le Caire/Istanbul/déc.1961 → / [XIII]	エジプト(カイロ)、トルコ(イスタンブール)	1961/12	
14	G S.TSUJI/[XIV]	参考文献や論文要旨、学会、学習院短大での講義題目	1961/4～	
15	(XV) / SUISSE / ITALIE-ESPAGNE / 1966. juillet-août / S.TSUJI	スイス、イタリア、スペイン	1966/7～8	
16	(XVI) / LONDON/OXFORD/Sep.1966 / S.TSUJI	イギリス(ロンドン、オックスフォード)	1966/9	
17	ALLEMAGNE/BUDAPEST/ 1969 / S.TSUJI	ドイツ(ケルン)、ハンガリー(ブダペスト)	1969/7～9	1968年7月、地谷雄高とソビエト経由で渡仏。プラハ、東西ベルリン、ミュンヘン、北欧、イタリアを旅行後、翌年9月までパリ滞在。1969年4月、プルトーニュ地方一周旅行。5月、イタリア旅行。6月、北フランス旅行。7月、ベルギー、ドイツを旅行。8月、北杜夫とスイスのキルヒベルクにあるトーマス・マンの墓へ
18	G PARIS/ITALIE/ 1969 / S.TSUJI	フランス(パリ)、イタリア(ナポリ、フィレンツェ、リミニ、ウルビーノ、ローマ)	1969/10	
19	ESPAGNE/ 1969 / S.TSUJI	スペイン	1969/10/6～11/3	
20	P Projets d'études pour/ 1971 / Sahoko TSUJI	I 論文(予定) / II 翻訳(予定) / III 講義(予定) IV Xerox copie (雑誌) / V 単行本論文リスト / 1971年(TOKYO)用	1971	
21	G 1971-72-73-74 / (名大関係メモ)	講義、研究室、図書、教授会、大学院	1971～74	1972年10月、北杜夫とドイツ旅行
22	G 1973 / PARIS-Bourgogne/ITALIA (Lombardia) / ENGLAND (East Anglia/New Northumbria)	フランス(パリ、ブルゴーニュ)、イタリア(ロンバルディア)、イギリス(エディンバラ、スコットランド)	1973	4月、パリ滞在(～9月)。8月、イタリア、イギリス、ブルゴーニュ地方等を旅行
23	P Projets d'études pour/ 1973-74 / Sahoko TSUJI		1973～74	
24	Voyage aux Indes/ 1974-75 / SAHOKO TSUJI	インド(ボンベイ、オーランガバット、アジャンタ、パッサール、カンチ、ポパール、デリー、アグラ、カジュラホ、ベナレス、バトナ、ラジギール、ブダガヤ、カルカッタ)	1974/12/21～1975/1/4	1974年12月から翌1月まで仏教遺跡の見学のためインド滞在
25	Tunisia / Algérie/Liban/ 1975 (mars-avril) / S.TSUJI	チュニジア、アルジェリア、レバノン	1975/3～4	3月、北アフリカの古代遺跡や美術館へ
26	(1)フランス Loire-Auvergne/ Velay-Provence/ (2)ドイツ Hildesheim-Idensen/Lübeck-Husum/ (3)ドイツ Reichene au Goldbach/Kampel/ (4)イタリア Roma-Napoli/Pompei-Syracusa-/Piasta-Aoueria/その他学会(Vat.)名大メモの一部あり / 1975 / juillet-octobre / S.TSUJI	フランス(ロワールオーヴェルニュ)、ドイツ(リュベック、フーズム、ライヒェナウ、ゴルトバッハ)、イタリア(ローマ、ナポリ、ボンベイ、シラクサ)	1975/7～10	7月、パリ滞在(～10月)。8月、中部・北ドイツへ旅行。9月、スイス、ナポリ、シチリアへ
27	(Sculpture Romane) / projet et Nous / II / 1975 / S.TSUJI / France Loire-Auvergne/etc./Allemagne Idensen/ Hildesheim	フランス、ドイツ(イテンセン、ヒルデスハイム)	1975/8～9	
28	1. Projet d'études / 2. Livres à commandes / 3. articles à lire / 1975-76 / Sahoko TSUJI		1975～76/5	1976年2月、パリ経由シリアに旅行。6月、タヒチ等南太平洋の島々をめぐる
29	GRÈCE/YUGOSLAVIA/ 1976.sep./SAHOKO TSUJI	ギリシア(アテネ、サロニキア)、ユーゴスラヴィア	1976/9/2～11	9月、ギリシア、ユーゴスラヴィアを旅行。11月、井上靖と日本作家代表团の一員として中国を旅行
30	RUSSIE/ I. / 1977 mai / S.TSUJI	ロシア(モスクワ、キエフ、レニングラード、ノヴゴロド)	1977/5/15～30	
31	Voyage en Russie/ II / 1.プーシュキン ビザンチン展 / 2.トレチャコフ イコン / 3.ルマゴレフ美術館(C・) / 1977. mai	ロシア	1977/5/15	5月、ソビエト旅行。6月までパリ滞在
32	VICQ-BRINAY/ 1977. juin / S.TSUJI	フランス(ヴィック、ブリネイ)	1977/6/1～	
33	1. Projets d'études / 2. articles à écrire / 3. livres à acheter / 1977-78 / Sahoko TSUJI	(1) 講義 / (2) 日本語訳案 / (3) 研究テーマ / (4) フランス語出版	1977～78	1978年10月、パリ滞在(～11月)。ポーランドを旅行。11月、ナント、ラ・ロシュエル、アラス等を旅行

★1979年以降の邦生の移動記録は「1980年6月、パリ滞在(～翌6月)。7月、イタリア、スイス、ドイツを旅行。9月、イタリア、スイスを旅行。10月、ブルゴーニュへ」。1981年1月、パリ滞在(～6月)。4月、ノルマンディ、プルトーニュを旅行。5月、ブルゴーニュへロマネスク美術探訪の旅。この後スイス旅行。9月、パリ滞在(～10月)。スペインを旅行。1982年3月、パリ滞在(～4月)。9月、パリ滞在(～10月)。1983年3月、トルコを旅行後、パリへ(～4月)。ノルマンディ地方を旅行。1984年3月、パリ滞在(～4月)。プルトーニュ地方、ベルギーを旅行。11月、パリ滞在(～12月)。ヴェルサイユへ。1985年6月、パリ滞在(～7月)。7月、マリ、セネガル等を旅行。1986年6月、パリ滞在(～10月)。スイス、イタリア等を旅行。1987年4月、パリ滞在(～5月)。7月、イタリア中部を旅行。10月、プルトーニュ、ロワール、南フランスを旅行。1988年6月、シチリアを旅行。1990年3月、パリ滞在(～4月)。ヴァランセー、ノルマンディ地方へ旅行。9月、パリ滞在(～10月)。ドイツを旅行。1991年9月、パリ滞在(～10月)。1992年9月、パリ滞在。帰途ニューヨーク滞在。1994年3月、パリ滞在(～4月)。ブルゴーニュ地方、ベリール地方を旅行。12月、パリ滞在(～翌1月)」と1994年まで多数回に及ぶ。(「高原文庫」第24号(軽井沢高原文庫、平成21年7月)より抜粋し、追記)

辻佐保子の手帳 — 邦生の手帳と比較して

辻佐保子の手帳は、昭和46年(1971)から急速する平成23年(2011)まで住んだ高輪宅にあった彼女の書斎の机の引出しから発見された。

手帳は、フランス政府給費留学生として渡航した昭和33年(1958)にはじまり、昭和53年(1978)までの20年間に使用されたもので33冊に及ぶ。

これらには、旅先で見た美術作品に対する感想や的確なスケッチがぎっしりと書かれている。佐保子の約60年間にわたる美術史研究者としてのスタートを飾るにふさわしい貴重な記録と言えよう。佐保子がいかに早くメモをとったかは、夫で小説家・辻邦生と邦生の旧制松本高等学校時代からの親友で小説家の北杜夫の対談で速記を務めたエピソードからも伺える。

また、当館収蔵の辻邦生関係資料には佐保子が使用した手帳と同型の手帳が現時点で30冊発見されている。これらは邦生の書斎机上に置かれた木箱の中に収められていたため、すぐに彼のものと判別が付きにくいが、両者は筆跡がよく似ており一見するだけでは佐保子と邦生の手帳の判別は付きにくい。邦生の手帳については、内容を確認し同定していく必要があるが、作品の構想、小説のプロット、登場人物のイメージなどが書かれているのが特徴だ。いわゆる創作の〈タネ帖〉、別名〈打出の小槌〉として使用していたものや創作の原動力になった〈旅〉の記録でもある。邦生は、昭和56年(1981)以降平成6年(1994)まで、ほぼ毎年渡仏し、フランス国内やイタリア、スイス、トルコ、ベルギー、マリ、セネガル等を訪れている。ほとんどの旅に佐保子は同行しているため、この期間の佐保子の手帳も存在する可能性がある。今後も調査を進めたい。

(学習院大学史料館学芸員/プロジェクト共同研究者: 富田ゆり)

ミュージアム・レター第44号

令和3年(2021)2月15日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(5992)1173

FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>